

## ■ ドル枯渇懸念に伴う過度なドル需要は解消へ…

NYダウ平均は、今週24日、25日の2日間で約2600ドルの戻りを見せ、徐々にではあるが、市場全体のムードも改善しつつあるように見える。むろん、新型コロナウイルスの感染拡大自体が収束しないかぎり本来の落ち着きは取り戻しようもないのであるが、主要各国・地域における政府・当局の政策努力が多少は実りつつあると見ることもできそうである。

大きかったのは、何より今週23日に米連邦準備理事会（FRB）が経済支援策第2弾を発表したこと。この日、FRBは米国債と政府支援機関（GSE）保証付きの住宅ローン担保証券（MBS）を無制限で購入することを決め、それを市場は素直に好感した。

前回更新分の本欄において「目の前でドルキャッシュの需要が見る見る逼迫して行く状況」について述べたが、今回のFRBの決定によって市場の「ドル枯渇懸念」が大きく後退したことは間違いない。

その証拠に、今週23日、24日のNY金先物価格は2日間で176ドル（1トロイオンス）も上昇している。思えば、一頃は「何が何でもドルキャッシュを手当てしておきたい」とする向きが、安全資産とされる金（ゴールド）まで現金化しようとしたために、NY金先物価格が大幅に下落する事態となっていた。その必要がなくなったことに加えて、安全資産としての金の価値があらためて見直され、再び金価格は大きく値上がりすることになったわけである。

さらに、今足下では約2兆ドルという史上最大規模の米景気刺激策に対する期待が盛り上がりており、そのことも市場全体のムードを改善することに大いに貢献している。すでに、米与野党間では関連法案の中身で最終合意に至っており、一両日中にも上下両院で可決し、早期実施を目指すとされている。なお、24日に会見したクロー国会経済会議（NEC）委員長は「（今回の景気刺激策によって）FRBに新たに4兆ドルの資金供給能力が生まれる」と述べていた。その具体的な中身には、「FRBによる社債の購入」が盛り込まれる可能性もあるという。

前回更新分でも述べたように、まだFRBには切れるカードが残っている。社債購入は有力な一手と見ていいだろうし、最終的には株式購入を検討する可能性だって皆無とは言えない。もちろん「状況を見ながら段階的に」ということにはなるだろうが、また幾つかの手が残されていることが事実である以上、過度に悲観に傾くのは慎みたいところと言えるだろう。

いずれにせよ、実際に足下でドル不足の状態が解消に向かっているのだとすれば、もはや当面のドル/円の上値余地は限られてくるだろうし、同時にユーロ/ドルには一定の戻り余地が生じるということにもなる。なにしろ、ドル/円にあっては3月9日に一時101.17円の安値を付けて以来、わずか2週間ほどの間に111円台後半の水準まで上値を伸ばす格好となったわけであるから、もともと目先の高値警戒感は強まっていたと言える。

また、参考までに月足チャート上で確認すると、直近高値=111.71円は、一目均衡表の月足「雲」上限と62カ月移動平均線がともに位置している水準で、ここはとりあえず上値抵抗として意識されやすい。目先を言えば、まず一目均衡表の日足「雲」を下抜けるかどうかが一つの焦点と言え、仮に下抜けた場合には、89日線が位置する水準（現在は109.07円）あたりまで一旦下押し可能性もあると見る。

一方のユーロ/ドルは、今週23日以降の戻りが鮮明となっており、足下では日足「雲」下限あたりまで持ち直してきている。今少し戻り余地はあると見られ、一つには1.1000ドルから日足「雲」上限あたりが当面の上値の目安。同水準を上抜けた場合には、次に31週移動平均線が位置する水準（現在は1.1037ドル）や週足「雲」下限（現在は1.1105ドル）などが目安になると見られる。

むろん、ドル枯渇懸念に基づく過度なドル需要が今後着実に解消に向かうとしても、基本的にユーロや円に対してドルが強みを有している点に変わりはない。